

2021 年 9 月 24 日

東京都市大学質保証外部評価委員会

## I. 総評

東京都市大学質保証外部評価委員会では、貴学の「内部質保証」および「教育課程・学習成果を中心とする3つの方針に基づく教育活動」の改善・向上に向けた取り組み、さらに、『ひらめき・こと・もの・ひと』づくりプログラム」の改善・向上に向けた取り組みについて点検・評価を行った。

「内部質保証」については、自己点検・評価を専門に担当するために設置された「大学評価室」が中心とするシステムを構築したうえで、大学基準協会が定める大学基準、点検項目に沿って、年次ごと学科ごとにきめ細かく点検、評価、分析していく活動方針には賛同かつ評価できる。過去の大学基準協会による「大学評価」での指摘事項に対する改善についても真摯に取り組んでいる。

「教育課程・学習成果を中心とする3つの方針に基づく教育活動」では、予測困難な時代において、教授型中心教育から「学習者中心の教育」へ転換するために、「教育の目標」「3つの方針」「3ポリシー」を示し、これに向けた取り組みを明確にし、評価結果に係る対応に真摯に取り組んでいる。また、ディプロマ・ポリシーの達成度評価結果を6つの能力指標をレーダーチャートで示すなどして、学生にも教員にもわかりやすく提示するなど、教育の状況の可視化と改善が行いやすいように、多方面に渡り精緻に計画して自己点検・評価を実施している点が評価できる。一方で、自己点検・評価活動を定常的な活動として、自律的に教育改善が行われている仕組みとして完成させることは今後の課題と思われる。

『ひらめき・こと・もの・ひと』づくりプログラム」は、独創的な発想のもと、新しい「もの」を生み出す「ひと」の育成に必要な資質能力を整理し、これまでの分野特化型の工学教育とは異なる分野横断的な新しい教育により全体最適解を見つけられる人材の育成を目的とする壮大なプログラムであり、その成果が期待される。特に「ひらめきづくり(1)～(5)」に10単位も割き、ひらめきの創り方を教育するという点は注目される。SD PBLの一施策としての本プログラムは、企業における縦割組織/文化を改善していく活動・行動につながる考え方である点からも賛同できる。理工学部を中心としてスタートした本プログラムが、今後、全学部へ展開される過程で明らかになる幅広い教養と深い専門性を両立した人材を育成する新しい大学教育プログラムの実現が期待される。

以上、今回の点検において、貴学の今後の教育・研究活動およびその自己点検・評価に係る活動において大きな問題を引き起こすことが懸念されるような事項は検出されなかった。一方で、貴学の取り組みをより良くするために改善が求められる点はいくつか見出された。今回の点検で検出された貴学の取り組みについての長所・特色として評価できる点と今後の改善が求められる点を以下に示す。

## II. 提言等

### 1. 理念・目的

<長所・特色に該当する事項>

- ・ 大学の建学の精神・理念・目的を適切に設定している。これを踏まえた学部の目標を明確に設定している
- ・ 大学の理念・目的、方針その他の活動についてホームページに公表をしている。ニュースレターなどにも内部質保証の内容とともに教育改革の取り組みを公表している

<改善のために努力が望まれる事項>

- ・ 大学の理念・目標・各学部における目的を実現するための中・長期の計画がわかりにくい。ホームページ等で確認できるとよい

## 2. 内部質保証

### <長所・特色に該当する事項>

- ・ 方針と目的が明確である
- ・ 自己点検・評価を責任を持って主体的に実施する専門部署「大学評価室」が設置され、大学全体の教育改善を総合的に管轄できる部署が設けられている
- ・ 「大学評価室」を中心に、実際に自己点検・評価が計画・実施・検証が行われており、今後、自己点検・評価の実施や改善が継続的に行われることが期待される
- ・ 自己点検・評価の際の各学部に対するコンサルテーションを目的として9月以降に行われるとされる「フォローアップ」や「セッション」は執行部や大学評価室と教育実施組織の理解の整合性を取り確かな教育改善効果を生むことが期待される
- ・ 内部質保証方針をホームページに掲載するとともに、内部質保証の推進に伴う責任を全学的な体制として主体的に自己点検・評価を行うものとして整備している

### <改善のために努力が望まれる事項>

- ・ 各施策は確かな効果が期待される反面、いずれも教育実施組織と大学評価室に大きな負荷がかかる。過剰な自己点検・評価活動で「評価疲れ」が起きないように工夫が必要である
- ・ 教育の内部質保証がどのような流れで実施されるのか、全体像が明確化されると良い
- ・ アンケート結果について、学生の声がどのように活かされ、どのように改善されているのか学生自身にわかりやすくする必要がある
- ・ 情報公開に関することとして、教員の紹介ページが検索に時間がかかる。また内容も充実されたい

## 3. 教育課程・学習成果（\*点検・評価項目③学生の受け入れに関する事項を含む）

### <長所・特色に該当する事項>

- ・ 3つの各ポリシーの目的が明確である
- ・ 全学共通の学位授与方針の策定に於いて、産業界等からの客観的な意見を取り入れている
- ・ 4つの方針をもとに具体的な活動につなげている。夢キャンパスなども地域の小中学校へ開くなど積極的な地域との連携づくり
- ・ 持続可能な社会発展をもたらす人材育成・学術研究として、「都市」をキーワードに学科ごとに目指す人材像を明確化している
- ・ 学修成果を把握・評価するために種々の測定方法を開発し、実施している
- ・ 規則に対して例外を認めないことを原則とし、避けられない例外については明確に規定していること（クォーター制、CAP制など）

### <改善のために努力が望まれる事項>

- ・ ディプロマサプレメントの基となるコンピテンシー評価の方法はこれという正解がないのが実情である。学習効果・教育効果・教育改善効果などと教育実施組織や評価室の負荷のバランスを常に念頭に置き、評価方法を継続的に更新することが必要と思われる
- ・ カリキュラム・ポリシーに基づき、授業科目を体系的に編成し適切な成績評価につなげ、ディプロマ・ポリシーを明確にした上で学位授与を行い、教育課程の編成や学生の受け入れ方針のアドミッションポリシーをさらに明確にされ進められたい。今後はこの方針の成果を十分に測定し、社会に示すことが求められる
- ・ カリキュラム・ポリシーにおいて、講義演習方式から課題探求型に変える際に、「テーマを設定したワークショップ方式」を採用すると企業における実践力が強化される
- ・ ディプロマ・ポリシーにおいては、これを活用する場面を設定すべきである（例：就活の採用面談での活用等）

#### 4. 「ひらめき・こと・もの・ひと」づくりプログラム

##### <長所・特色に該当する事項>

- ・ 分野細分化された「もの」づくり教育が国際競争力を低下させたという総括の下で徹底して分野横断的な幅広い教育を行い、「全体最適解」を見つけられる人材の育成を目指している。「全体最適解」を身に付けさせるためにどのような力を身に付けさせるのかをさらに明らかにすることが必要になるが、この力の育成をどのように身に付けさせていくのかに興味をもって注目できる
- ・ 個々の科目が独立している個別的思考アプローチを廃し、全体最適解的志向アプローチに基づいてテーマと科目の繋がり・科目間連携を重視している
- ・ 自ら問題を発見し、他と協働して全体最適解を導き出し、新たな価値を見出す人材として、先行き不透明な時代に合った目標を設定している。この目標を学生自身が理解し、それに向けて必要な力を学生自身が身に付けるように履修内容を選択したり、自己評価ができたりするとさらによいものになると期待できる
- ・ 各学科横断で社会課題・消費者目線で課題を探究していく活動は、企業の中においても実践力として活用できる

##### <改善のために努力が望まれる事項>

- ・ 目標の実現性、特にひらめきづくりの教育的効果がまだ明確ではないように思われる。本事業の大きな核の一つであることから、何らかの形で定量的な評価を行い検証することが必須と思われる
- ・ プログラムを推進する上で、ディスカッションの課題・具体的なテーマ設定を推進側自らが考える必要がある。(目的、課題設定のないディスカッションやWSは失敗する)
- ・ 国際標準である ISO56002 イノベーションマネジメントシステム (IMS) や「デザイン思考」の考え方を推進サイドが理解して、牽引・ファシリテートしてほしい
- ・ リーダーという概念がどのようなものを指すのかがわかりにくい。時代の流れで必要なリーダー像とどのような力を身に付けるとリーダーになりうるのかを示す
- ・ 新しい教育の発展とともに必ず議論される点である基礎力、専門性の育成との関連についても述べておく必要がある
- ・ ものづくり力、ひらめきづくり力、ことづくり力、ひとづくり力、AI ビックデータの 5 つの力は、学生にも分かりやすくという配慮からこの力の名称になったと考えられるが、漠然としていてどのような力が身につくのか、また身に付ける必要があるのかが、わかりにくくなっているとも考えられる。説明を加えるなどわかりやすくするとよい
- ・ カリキュラムにおいて、学生の「発想力や提案力を磨く」という点が魅力的であるが、挑戦的な取り組みであるこの新しいプログラムがどのようなものなのかが現段階ではわかりにくい。今後学生が理解した上で履修させる必要がある
- ・ 課題解決力、問題発見力など、テストで測れない実社会に必要な非認知能力コンピテンシー等がこれから必要な観点であるが、この評価の方法が現段階では明らかにされていない。このテストで測れない力を評価するとあるが、何をどのように評価をするのかが課題である
- ・ 全学的な取り組みとあるが、今後どのように進めていくかがわかりにくい。今後の発展のさせ方がわかるとよい
- ・ スタートの地点においては、学生のサポート体制が重要となる。理解が深まらず履修に課題のある学生に対する履修指導や方向転換をしたい学生への学び直しといったサポート体制が成功の鍵になる

以上